# 松が岬・大町通り界隈

前項ではエリアCを「かつての米沢の中心」と紹介しましたが、それ以前の中心エリアが、ここ上杉神社周辺および大町界隈です。

上杉神社および松が岬公園は、元米沢城本丸であり、大町は、城にもっとも近い町人町として、また大店が軒をならべる問屋街として大いに賑わったところです。まさに江戸時代における米沢の政治・経済の中心は、この界隈だったといえるでしょう。

そんな様相が一変したのは、いわずと知れた明治維新の後のことでした。米沢城はまず二の丸から解体が進み、堀は埋め立てられ、土居は崩され、徐々にその姿を失っていきました。本丸跡が公園として一般に開放されたのは明治七年（一八七四）のことですが、公園とは名ばかりの荒れはてた状態だったといいます。明治十八年（一八八五）、この様子を見かねた有志が、甘棠会（かんとうかい）という城跡整備のための団体を結成、これにより、松が岬公園はようやく公園らしい体裁を整えていったのです。

明治時代に造られた舞鶴橋

上杉神社は、公園よりも早く明治九年（一八七六）には現在のような形に整備されています。驚くべきことに、この社殿や境内地などの整備費用は、すべて地元の人々からの寄付金でまかなわれていました。甘棠会のことといい、公園にも神社にも、当時の人々の並々ならぬ思いが込められていることがわかります。そう思えば、散策途中のなにげない光景も、趣深いものに見えてくるかもしれません。

このような歴史をもつエリアなので、現在では、史跡や博物館・資料館などが点在する文化・観光の中心として賑わっています。

また、小さいながらも個性的な店が多いのもこの界隈の魅力のひとつです。風情のあるお土産屋・こだわりの雑貨・かばん・パン・むしパン・甘納豆、エスニック料理店からドッグカフェ…などなど。ぶらりと歩くのが楽しいエリアとなっています。

## 県社通り

明治十四年（一八八一）に開通した新しい道路で、上杉神社から東にまっすぐのびています。その名は、起点となっている上杉神社の社格「県社」に由来するものです。かつては大きな鳥居や灯篭が配されて、まさに県社のための道といった趣でした。しかし、現在ではまったく普通の道路で、「県社通り」と呼ばれることも少なくなってきているようです。

県社通り（上杉神社方向）

なお、開通当初は大町通りまでしか通じておらず、大門交番の交差点はT字路になっていました。大町通りが、当時いかに重要な道とされていたのかがうかがえます。現在のように東寺町通りまで延長されたのは、市内の大半が焼失した大正の大火後のことです。

## 大町通り

大町は江戸時代以前からあった古い町人町のひとつで、中心的な町・大きな町であることから名付けられたといいます。

江戸時代には、城下随一の問屋街であり、また高札場（こうさつば）があったことから交通の中心でもありました。高札場とは、藩から町人への連絡掲示板のことです。現在、小関洋服店がある交差点の真ん中に設けられており、そこは高札場交差点＝「札の辻」とよばれ、里程の基点になっていました。江戸でいえば日本橋、大いに賑わったというのもうなづけます。

札の辻のあった場所

また、大町は御用商人・豪商の町でもありました。当時、屋敷一軒の間口は六間が基本でしたが、大町には間口が十五間・二十一間・三十間といった広大な屋敷をもつ商人が何人もいて、彼らは藩に何万両と借り上げられても破産せず、その経世の才を見込まれて公の役職につくこともあれば、豪奢な遊びが過ぎて処罰されることもありました。そんな豪商たちも、明治維新以後の急激な社会の変化によって次第に姿を消していきます。

現在、大町通りを歩いてみると、実は土蔵がとても多いことに気がつきます。大町商人の半分は蔵持ちだったという往時の賑わいを想像しながら歩くのも、城下町の楽しみ方のひとつです。

エリアD

## 足をのばして……

### 伝国の杜

松が岬公園から県社通りにでてすぐ右手には、平成十三年（二〇〇一）にオープンした米沢市上杉博物館と置賜文化ホールからなる複合文化施設「伝国の杜」があります。

施設内は、博物館の展示室とホール以外は無料ゾーンとなっており、開館時間内であれば自由に利用することができます。置賜文化ホール自慢の可動式能舞台があるエントランスホールは、ガラス張りで広々としており、ベンチでくつろぎながら風景を楽しむこともできます。また、博物館の体験学習室・情報ライブラリー・ミュージアムショップも無料ゾーンで、本を読んだりグッズをながめたり、いろいろなワークショップに参加したり…と、楽しみ方はさまざま。松が岬公園を望むカフェは、桜や紅葉の季節が特におすすめです。

公立の文化施設というと堅苦しい感じがしますが、伝国の杜は、気軽に立ち寄れるオープンな施設となっています。

伝国の杜

### 米沢民藝館

大町通りの北端近くにある米沢民藝館は、絹・木綿が普及する以前の布や染織技術を研究・復元し紹介している施設です。

表の原始布・古代織参考館では、江戸時代やそれ以前の着物や織機、復元した古代織の作品などを展示しています。これら展示品を収集・製作しているのが、裏にある工房 出羽の織座です。民藝とは、実用的で健やかな手仕事のわざ、美術的ではなく民衆的な工藝のことをいいます。ここでは、展示館と工房が一体となって、失われつつある手仕事の布を現代によみがえらせる活動をしています。

なお、同館の建物は、今ではほとんど残っていないという機蔵（はたくら）（機織工場として使われた土蔵）を移築したもので、米沢市景観賞を受賞しています。その佇まいとあわせて、季節ごとに掛けかえられる表口ののれんも風情たっぷりで、見る人の心を和ませてくれます。のれんは、もちろん出羽の織座の作品です。

原始布古代織参考館

フォトギャラリー

米沢の美しい風景

# 松が岬公園の四季

夜桜も美しい春の夜

お堀の一角が蓮にうめつくされます

美しい桜の紅葉

雪灯篭まつりの幻想的な空間